

「木村武雄と石原将軍」

木村武征

昭和初期、当時県会議員の木村は、東北地方に周期的に訪れる冷害による農村大不況を目の当たりにし、何とかならないものかと考えをめぐらせていた。特に昭和9年の冷害は酷いもので4月30日にミズレが降り出し、5月には山形県下一帯に大豪雨があり、約2週間降り続いた。その為山間地域の作柄は皆無の状態、平野地方でも通常の3割～4割程度の不作であり、そのため食べる米もなく、食減らしの為に子女の人身売買が横行したのもこの時期である。しかも農民達の6割～7割程は小作農であり、例外による被害の上に地主からの搾取という二重の苦しみにもがいていた。そこで、木村はそういった窮地をみるにしのびず、以前より朝倉七朗・山本武・平田安治・島貫武雄らと共に農民達を組織化して活動していた「置賜農民同盟」(※以下農民同盟)を更に活性化させ、県会に飯米貸下げの議案を提出すると同時に、政府に対し東京の深川、本所などの倉庫に眠る政府米の「飯米貸下げ運動」を行なった。

木村と石原の出会いはこの頃、昭和8年末から9年前半頃とされ、当時仙台で第二師団の第四連隊長であった将軍に面会し、接触が始まったとされている。なぜ、木村武雄が石原莞爾に興味を抱いたか、それはやはり「農民」というものが1つのキーワードになっている。木村の農民運動が行き詰まっている時、軍隊において農民出身者に対し同郷同士を編制して郷土の話等で楽しみを与える“郷土別中隊制”や、兵営の中に農事研究会をつくり兎や鶏を飼わせて農民生活より離れないようにし、除隊時にその鶏や兎を土産にもたしてやるとか、とにかく「農民に理解の深い」卓越した指導者だという噂を耳にしており、東北の農民達の中に絶大な人気があった。又、満州事変以来、板垣征四郎と共に名声高い時期でもあり、木村は農民同盟行き詰まりの打開の道として「これは是非意見が聞きたい」と願った。

++++
++++

しかし、石原に会うその手づるがない。そこで、以前から木村と親しかった中野正剛や杉浦晴男らが石原と懇意にしていると聞き、杉浦晴男を訪ねて早速紹介状を書いてもらった。そうした経緯で木村は紹介状を手にし、仙台の連兵場に石原を訪ねた。木村が初めて石原を訪ねた時、丁度その日は第四連隊が愛子野(あやしの)練兵場で演習中であり、連隊長は不在とのことで、仙台から自動車を走らせ愛子野練兵場に行き、入り口に立つ歩哨に——実はこういうわけで石原連隊長にお目にかかりた

いのだが——と話すと、向こうで馬に乗っているのが連隊長だと教えられ、——自動車を乗り入れて連隊長の所へ行っても良いか——と訪ねると、良いとこのことなので、練兵場を疾駆させ連隊長のところへ木村は向かった。

すると、何を思ったか連隊長である石原は馬に乗ったまま一目散に駆け出した。そこで木村は——自動車で追いかけるのは失礼だ——と思い直し、恐らく憤慨して馬を駆けられたのだと察して、降りて徒歩で追いかけた。そうすると石原は馬をそのまま止めて待ち始めた。木村は石原近づき、杉浦の名刺を差し出して、思ってたやっきたと話をすると、石原は開口一番「いやいやすまなかった、自動車で見たから多分、東京から来た陸軍省のお役人が来たと思って逃げ出したんだ。わしはお役人が大嫌いであ、今自動車から降りた姿を見ると軍服姿のお役人ではなく民間の人だと分かったので、止まって待っていたんだ。逃げ出してすまなかったなあ」ということだった。これが木村武雄と石原将軍の初対面の瞬間である。

この時から木村は行き詰まると、米沢から塩釜の漁港に向かう、魚を運ぶ夜行トラックの往復便に便乗し、度々石原を訪ねるようになり、そして心酔していくことになる。木村の農民同盟は最終戦争論にまでいかずとも、農村不況の打開策の延長線上で石原の思想に共鳴する余地は多分にあり、農民同盟の運営は農村の現状と、石原のアドバイスによりなされていった。

昭和 11 年、木村が 33 歳で最年少代議士、国政に初当選の年である。二・二六事件の起こる直前に当選となり、初めての国会のための上京の日が二・二六であり、波乱含みの国会デビューとなる。そして、同年 5 月、中野正剛が東方会を結成すると、これに木村も参加。木村の支持基盤のひとつでもある農民同盟も東方会支部となり、木村組織下の東方会支部はやがて東北全土に広がり始める。しかし、石原に心酔していた木村は中野と石原とでは思想上、対支理解に大きな隔たりがあり、その後木村は東方会の活動から徐々に遠ざかりはじめる。

++++
++++

昭和 13 年、この時石原将軍は東大病院に入院しており、木村はその見舞いの時に石原より「支那事変解決の根本策」という三枚綴りのパンフレットを見せられた。そのパンフレットには、後の東亜連盟協会の骨格部分である、中国からの日本軍撤退・政治の独立・経済の一体化・アジア国防の共同、といった内容が書かれており、それを見たのをきっかけに木村は東亜連盟思想の実戦団体をつくることを画策した。東亜連盟思想の実戦団体の中心には軍人の石原ではなく、かねてから彼の政治力に期待

し、出来るなら東方会の組織を流用して中野正剛を持ってくることを思いつき、板垣陸相より3万円をその運動費として引き出し、同昭和13年内には東方会本部の裏に新しい建物が出来るなど、中野正剛中心の東亜連盟運動を始める準備が整った。

しかし、石原と中野の思想の隔たりと、木村の東方会の活動から遠ざかっていた関係と、木村の石原思想への傾倒が東方会除名騒ぎに発展し、それがキッカケにもなり中野を持ち出すことを断念。木村自らが理事長となり、農民運動家の淡谷悠蔵等を引き入れ、昭和14年10月8日に東京・赤坂に本部を設置し、「東亜連盟協会」を結成したのである。その後、東北地方各地の木村傘下の東方会支部が東亜連盟協会支部となり、それを皮切りに支部が次第に増え始め、やがて正会員数も10万人という大規模な運動へと発展していく。

しかし、昭和15年に大政翼賛会が発足し、木村はこれに対抗すべく「東亜連盟促進議員連盟」を発足させるが、翼賛体制からの圧力でそれに失敗。そして石原が軍を退役し、協会の顧問として運動を事実上指導する事になると、これまでの活動を「木村の政治勢力拡大路線」と不信感を抱き石原は木村を非難。木村は協会運営から手を引かざるを得なくなってしまう。後に、その時の様子を木村はこう語っている。「東亜連盟協会の第1回の参与会員会議の席上でした。先生は今までの運動の間違いを徹底的に批判されるのです。

その指導の中心が私ですからたまったものではありません。そして、これからの運動は今までの運動とは根本的に違ったものとする。どのような逆境、弾圧の中でも屈しない同志を迎えそれを養成しなければならない。大胆に言って名誉欲や物欲のない者である。結論としては、今までは宣伝の時代であり、これはこれでよかったという講釈で終わったが、聞いている私にとっては身震いのするような批判をされるので、穴があったら入りたい気分になった。しかし今になってその一つ一つが生きた勉強だったと肝に銘じて感謝しております。」

++++
++++

その後、協会は政府による興亜同盟吸収の問題を抱え、木村は東条内閣に追われ、数々の思いを残したまま上海を逃れ、上海において「木村公館」を設立。山本武、田口卓爾らと中国本土にて東亜連盟の思想を元に独自の活動を中国の民衆のために行い、終戦間際に帰国。昭和20年10月は鳩山一郎を党首とする自由党の結党に加わるが、翌21年4月、戦後第1回目の衆議院選挙の出馬表明直後に東亜連盟協会の中心人物としてGHQより追放処分となり、一切の政治活動を断念せざるを得な

くなった。木村の地盤を確保するため、数人の同志達が政界に乗り出そうと試みたが東亜連盟関係者としてことごとく選挙失格、追放。木村はその地盤まで失い、失意の底に落ち込んでいくことになる。

そして、その失意に止めを刺すような出来事が起こる。昭和 24 年 8 月 15 日、東京の木村の手元に同志で、協会の後任を託した和田より電報が届く。「今朝 8 時 55 分、石原莞爾先生他界ス」木村はとるものもとりあえず、飛ぶような思いで西山農場へ馳せ参じた。木村は「空白がぼっかり身を包み、からからに乾いた口からは一片の言葉も出てこなかった。」と後に語っている。

昭和 27 年の春、足掛け 7 年の追放を経て木村は晴れて追放解除となり、再び政界に返り咲き、保守大合同を画策し、佐藤内閣にて初入閣。その後、田中角栄を自らが発起人として担ぎ上げ、田中内閣を擁立し、同内閣にて建設大臣、国家公安委員長等を歴任し、“元帥”と呼称され、昭和 58 年 11 月 26 日午後零時 40 分、81 歳にてその波乱に満ちた生涯を郷里、米沢にて閉じた。

++++
++++

木村は晩年の昭和 52 年に自身の自叙伝、前書きにて石原将軍への思いをこう語る。「将軍を慕っていた私は、将軍の好きなものを好きになり、嫌いなものは無理にでも嫌いになった。私の人生にとって石原将軍との出会いが取れ程大きな思いをもっただろう。無学にして人格者でもない私が、高邁な人格者である石原将軍の弟子であったといえば将軍は苦笑いされるであろうが、それでも私は真剣に将軍に師事し、将軍の指向される道を可能な限り忠実に歩こうと努力したことにおいて、自分では“弟子”を標榜して恥ないのである。

私の生涯でこれほど尊敬し、これほど好きになった人はいなかった。将軍を慕う気持ちは、しかも、将軍が逝かれてのちも、時が経てば経つほどつのる一方なのである。色恋は時が経てば冷めていくものだが、私の将軍への思慕は強まるばかりなのである。将軍は軍人でありながら、本質的には戦争が嫌いであり、したがって好戦的軍人が嫌いであった。そのために私も戦争を憎み、あの太平洋戦時下でさえ、反戦、反軍的に身を挺し、石原将軍に見護られて、“民族協和”の運動を続けたのであった。

石原将軍にお会い出来た事を無上の光栄に思う。私の人生は言うなれば石原先生を慕い焦がれて綴られた人生である。先生の姿も声も明瞭に私の脳裏に焼きついてい

るので、決して寂しいと考えた事はないし、また、いつ死んでもいいとさえ思っている。この自叙伝を私は石原将軍に相談しいしい書き綴るつもりでいる。」

木村武雄の自室の枕元には石原将軍の遺影が掲げられ、時折その写真に向かい、何かを相談しているような目をしていた事をうっすらと記憶している。今日も、天国にて石原将軍と現在の日本を見て語り合っているのが目に浮かぶようである。